

## ティータフラッグス2020 作品一覧

作品No	タイトル	説明文
1	MOTOBU Coral Roof	テーブルサンゴのように陽射しや雨から人々を柔らかに覆い守り、太陽の動きにより表情を変える大屋根空間を考えました。
2	LINK	待合スペースで交流が生まれ、人と人、人とモノ、モノとモノが軸によってつながる「LINKする」利便施設を提案します。
3	広がるカープチャー屋根	カープチャーの表皮を広げたような屋根を構え、包含する空間を感じながら、爽やかに楽しい思い出づくりができる場所をつくる。
4	風屋根の下の待合所 ～気持ちシェアするおらかな環境をつくる～	大きな屋根の下に居合わせた、旅行者同士のワクワクした気持ちのふくらみが重なる環境をつくることで、気持ちをシェアすることができる待合所を提案します
5	フクギノぼーと	宙にうかぶハートロックは、本都町の新しいフォトジェニックな場所として修学旅行生の思い出となる、思い出の「フクギノぼーと」。
6	花弁が包むやね	本都町の花木のシンボルでもあるカンヒザクラをモチーフとした屋根を計画。下を通り抜ける涼しい海風は利用者を優しく包み込む。
7	おおきなねこのきのしたで	本都町吉島にある「本都富士」をイメージした荷捌き利便施設。船を利用する人には、「憩い」の場を、港を利用する作業員には、「快適」な場を。
8	TRES+ANGULUS トライアングル	「敷地を覆うかけ」、「回避性とたまり場」、「人とコンテナを屋根の高さでわける柔軟な空間」を多角・多様な表情を持った三角形をつなぎ、つくりだします。
9	インビジブルグスク	波、風、行き交う船や人、流れゆく時の中でそこに在り続け、利用者を包み込みながら、時間、距離を超えてゆく建築を提案します。
10	さんごの寄合い所	“珊瑚に集まる魚のように、人々が集い、賑わう空間”がコンセプトです。形や大きさが異なる4枚の屋根は、それぞれ高さをずらして配置することで、サンゴの重なったイメージを表現します。
11	人々を見守る波	屋根を曲面にして「波」を表現し、旅行者の親類や友人の見送り、再会を見守る波をイメージしています。
12	海とつながる待機スペース	旅路の合間のひととき、潮騒や潮風、差し込む日差しを感じながら、ココロとカラダを癒し、解きほぐせる空間を提案する。
13	浮島テラス	施設を利用する人や、周辺の住民既存施設など「だれに対してもやさしい施設」をコンセプトに計画しました。
14	Puzzle	一枚の屋根を分解する。分解した屋根それぞれにふるまいを与え再構築する。それぞれにふるまう屋根を繋ぎ合わせ、ちょっとワクワクする新たな場を提案します。
15	imaginary umbrella	“柱に支えられた屋根”という関係性の中に“柱と屋根を結ぶ輪の集合体”を挿入し、浮遊感とゆらぎの表情を持つ軒下空間を生み出します。
16	ミンサーゲート ～観光と産業の玄関口～	ヒトとモノが行き交い、観光拠点と産業拠点の二面性を持っているこの場所に、沖縄らしい佇まいで人々を招き入れる屋根を提案する。
17	“Wrap” ～人々の憩い・思い出をユリの花が包み込む～	この場所に訪れる人々の憩い・思い出を白い膜屋根が優しく包み込む。その様子を、ユリの花びらを連想させる屋根形状とすることで表現した。
18	雨を見上げる	雨と人を分断している屋根を、すりガラスを使ってつなげることで、雨と人が親しみあう軒下を提案します。
19	2と3要素がある建築	柱と屋根の2つの要素で構成した建築物を設計し、建築的機能の3つの要素である採光、防音、換気をもたらす。
20	本都港エントランスルーフ	本都港にある施設や自然の有機的なイメージに調和するエントランスルーフを提案します。東シナ海の島々、西に見える山岳、そして周辺施設と一緒に新しい風景をつくり出します。
21	海の家	広い屋根空間に沖縄の青い空と風を心地よく感じられる、海の家のような空間を目指しました。
22	Go To 伊江島	伊江島へ出航するフェリーをイメージしました。壁・屋根を雁行させ季節や角度によって表情が変わり、個性的な外観が待機する時間も楽しめる建物です。
23	Cape	岬をイメージしたフレキシビリティな空間を計画しました。
24	雁行する段々ベンチ	団体客のフェリーへ向かう動線と既存建物の雁行したデッキ部分の間に斜めにふたつ段々ベンチを入れることで、視線や動線をデザインした。
25	しゅっぱつする実感を演出する屋根	荷捌きから待機、乗船するまでの過程で利用者が見る動的な景色に起承転結を与えることで、「しゅっぱつする実感を演出する屋根」を提案します。
26	シマアシャギ	“屋根を架ける”というシンプルな建築行為に、“屋根を掲げる”という何気ない設えが、この港に島の良さを留めます。
27	KOMPAS 一見えないぐずく山との対話	港からは見えないぐずく山を指し示すコンパスのような、大きな屋根をもつ建築を、風景になじむように計画する。見えないうずく山を顕在化しつながら。
28	青の出立所	船が出航するまでの一瞬間、「青に包まれた空間」で過ごすことで、これから始まる旅路を予感させる。
29	“connect” roof	本島北部の玄関口として、周辺離島とのつながり、ここで行われる様々な行動のつながり、人と人とのつながり、自然豊かな周辺環境とのつながりを包み込む大屋根を提案します。
30	時の屋根	本都港の時間の流れを屋根部材で表現しました。港と共に時を刻み訪れる人々を見守るような屋根を目指しました。
31	寄り添う屋根	曲面の大屋根は、海や空の風景、屋根下空間へ取り込む。海に寄り添い、山に寄り添い、人に寄り添う。そんな港の大屋根空間です。
32	記憶の風景 ～アルミニウムの空間～	変わってゆく風景のなかで、変わらない風景を、アルミという時間経過を感じさせない素材を使用し、利用した人の記憶の風景として残ればと思います。
33	カルストアーチの門と2枚の屋根	本都町を代表する円錐カルスト地形の美しい山並みをモチーフとしたアーチ形の「門」を持つ施設を提案する。
34	港と人をつなぐ折り上げ屋根	周囲のに向かって開くように折り上げた大屋根が本都港に新たな賑わいの場を生み出します。
35	旅路を見守るサングワ	この場所に訪れる人々を包み込み、やすらかな旅路を見守る建築を提案します。
36	Green Wave Roof ～人々と島をつなぐ屋根～	人々が集い島と本島を往来する港を自然で包み込み、利用するすべての人に癒やしを与えられるような空間を創作した。
37	日曜の広場	グリッドを壊すことで、子供に遊び場を提供し、皆がありのままに過ごせる“日曜日”のような広場。
38	大空と海を感じる波型ルーフ	周辺のランドスケープや既存施設に溶け込みながら、大空と海を感じられる波型の屋根を持つ本都港利便施設の提案。
39	境界そのぞむ「曲線の屋根」	多くの境界の目目に位置する本都町。その境界に対して階調を与えながら両者を臨むことのできる施設の計画を行った。
40	雲間	人造の雲のような空間。厚みのある半透明の屋根から木漏れ日のように日が差し、日常の自然現象を増幅させ可視化させる装置となる。
41	旅時間を波の下で	「波」をモチーフとして、荷捌き場や団体旅行客の待機スペースとしての機能を果たしつつ、訪れた人々の旅の1ページに残るような施設を提案します。
42	開いて閉じて	コロナウィルスの影響により、沖縄県の離島観光の変化を感じました。可動壁によって荷捌き施設と待合所の利用に幅を持たせることで利便性を高める事を提案します。
43	大きな木の下	船を待つ時間も楽しむ。島に向かう人にとっての「よりどころ」となる場の創出